

読書コミュニティの創出に向けての基礎的研究

—社会教育施設における読書活動推進事例の検討—

花坂 歩・永田 誠

A Basic Study on the Creation of Reading Community

—Survey of Reading Activity Promotion Practices in a Social Education Facility—

HANASAKA, Ayumu and NAGATA, Makoto

大分大学教育学部研究紀要 第38巻第1号

2016年9月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 38, No. 1, September 2016

OITA, JAPAN

読書コミュニティの創出に向けての基礎的研究

—社会教育施設における読書活動推進事例の検討—

花 坂 歩*・永 田 誠**

【要 旨】 本稿は社会教育施設における読書活動推進事業を視察・検討したものである。読書教育は、もはや学校の教育活動に限定されるものではなく、家庭教育、地域教育との連携によって推進されるべきものとなった。今回、北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸の読書活動推進事業「ネイパルブックワールド」に参加し、子どもたちが学校の外でどのような読書活動を体験しているのかを視察した。そこでの子どもたちは、読書を生活の一部とし、緩やかな読書コミュニティを形成していた。見出された課題は、読書を指導する専門スタッフの不在と施設間連携の不均衡である。子どもを自立した読者へと育てていくためには、様々な機関が協働して読書教育を行っていく必要がある。「ネイパルブックワールド」の視察と考察によって、そうした課題を具体的に見出すことができた。

【キーワード】 読書活動の推進 自然の家 読書コミュニティ

I 問題と目的

稿者の一人である花坂はこれまで読み手と作品の相互作用の解明及びその作用を活性化させるための学習材開発に取り組んできた(花坂;2013,2014,2015)。今回、社会教育施設における読書活動の推進事業を視察し、①教室の外で子どもたちはどのような読み手として読書に関与しているのか、また、②社会教育施設の指導者はどのように子どもに読書を促しているのかを調査した。対象となる社会教育施設は、「北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル^{あつけし}厚岸」(以下、「ネイパル厚岸」)である¹⁾。

ネイパル厚岸では、平成 24 年度から読書活動推進事業「ネイパルブックワールド」を開催し、今回(2015.10.9 時点)で 6 回目(平成 24 年度:11 月・2 月,平成 25 年度:11 月,平成 26 年度:10・12 月,平成 27 年度:10 月)の実施となる。参加は小学校 3 年生から中学校 3 年生までのおよそ 65 名程度(回によって参加人数は異なる。43 名～ 91 名)。当該事業では、これまで、山小屋のランプの光で読書をする体験、雪中テントに宿泊し、その中で読み聞かせを行う体験、キャンプファイヤーを囲んでの読書体験、本を使った読書ゲーム、ブックトーク等の様々な活動を通して、普段、読書になじみのない子どもを読書に引き込んできた。このように、

平成 28 年 5 月 19 日受理

*はなさか・あゆむ 大分大学教育学部言語教育講座(国語科教育学)

**ながた・まこと 大分大学教育学部発達科学教育講座(教育学)

非日常的な空間の演出による読書活動推進の取り組みは全国的に見ても特異であろう。

本稿では、その視察報告を行った上で、まずは花坂が学校教育（国語科教育）の立場から考察を加える。そして、社会教育の立場から永田が考察し、生涯学習を視野に入れた読書教育の質的向上を図りたい。

II 現地調査の成果

(1) 調査対象となる事業の概要

事業名：ネイパルブックワールド～ファンタジーフォレストをつくろう！

主催：北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸

共催：釧路市教育委員会，釧路市立図書館

実施：平成27年10月10日（土）～12日（月）

会場：ネイパル厚岸（厚岸町），釧路市立図書館（釧路市），
山小屋らんぷのいえ（厚岸町）

対象：小学校3年生～中学校3年生

定員：募集60名

費用：6,500円

当日の参加者は49名，その内訳は表1の通りである。参加者の大半は小学生で，中学生の参加は全体の6.0%（49人中3人）にすぎない。

企画・運営はネイパル厚岸の専任スタッフが行う。その他，ボランテ

ィアスタッフが11名おり，5～7名の子どもを1グループにした8つのグループ（男女別・年齢別）のそれぞれにリーダーとして付き添っていた。ボランティアスタッフは統括係が1名，特別な支援が必要と思われる子どもがいるグループには2名のボランティアスタッフを配すなどの工夫が見られた。

費用6500円の内訳は，宿泊費300円×2泊，朝食500円×2食，昼食500円×2食，夕食700円×2食，諸費2246円，保険代254円となっている。そのうち，諸費の項目はバス代，飲み物代，お菓子代，集合写真代，共通経費である。

本事業の目的については，参加者に対しては，「本に親しむ体験活動をとおして参加者の読書に対する意欲を高める。」のように伝えている。運営側の目標としては，「関係機関（図書館等）と連携して，読書の楽しさに触れさせる」，留意点として，「じっくり読書に親しむことのできる時間を確保する。」，「図書館司書と連携し，体験活動（幼児への読み聞かせ）を行う。」，「山小屋での読書や，テントでの読書など，非日常空間での読書を楽しめるようにする。」を掲げている。

その他，関連プログラムとして，「読書とネット講演会」と「ファンタジーフォレスト」（子供たちによる読み聞かせ会）が計画されていた²⁾。

	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	計
男(人)	3	1	11	2	0	1	0	18
女(人)	7	11	8	3	2	0	0	31
計(人)	10	12	19	5	2	1	0	49
割合(%)	20.4	24.5	38.8	10.2	4.0	2.0	0.0	

表1 参加者内訳(H27.10実施)

(2) 調査方法

今回、主催者の全面的な協力を得て、プログラムのほぼすべてに参加することができた³⁾。その大半は参観であったが、ところどころで稿者（花坂）が参加者の子どもやボランティアスタッフに関わる場面があり、観察者の立場だけでなく、活動支援者の立場からも事業を調査することができた。調査の方法はプログラムの実体験、カメラによる映像保存、子どもの読み聞かせの録音、スタッフへのインタビュー等による。

(3) 事業の実際

日程の概要は図1の通りである。以下にプログラムの詳細を述べていく。

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
10/10 (土)	【「まなぼつと」に集合】 受付時間 9:30~10:00			受付	オリエンテー ション&なかま づくり	昼食	①図書館まるごと大発見 ②目指せ！プロの読み聞かせ ③本選びの目利きになろう！			ネイバルに移動	夕食・入浴・就寝準備		ナイトシア ター 『ゼロ弾き のゴー シュ』		就 寝
10/11 (日)	起床 洗面 清掃	朝食	活動 準備	①のんびり読書@山小屋 ②ティーブレイク読書 ③ファンタジーフォレストを作ろう (昼食12:00~13:00)								夕食 休憩	読み聞か せの極意 (本番に向 けての練 習)	入浴 就寝準備	就 寝
10/12 (月)	起床 洗面 清掃	朝食	部 屋 点 検	準備 練習	ミッション実行！	昼食	振 り 返 り	ネイバル厚岸で解散 終了時間 13:40							

※全体を3つの大グループに分け、10日、11日の①・②・③は順番を入れ替えて実施されていた。

図1 日程の概要

①オリエンテーション&なかまづくり（人間関係作り） 所要時間 90分

開会式の後、「後出しじゃんけん」（リーダーの出した手を瞬時に判断して、参加者がリーダーに勝てる手を出すゲーム。）、「グーパー体操」（リーダーの合図に従って、グーとパーを入れ替える体操。思い通りに手が動かないこともあり、体の緊張がほぐれる。）、「ネームトス」（任意の人の名前を呼んで相手が受け取りやすいようにボール等を投げ合うゲーム。）などを行い、初めて出会う子どもたちの緊張を解こうとしていた。

②図書館まるごと大発見（図書館の施設案内） 所要時間 45分 於 釧路市立図書館

司書の案内で図書館全体を回る。所蔵図書についての解説の他、書庫や「としょかんバス」（Bookmobile：移動図書館）の内部等、普段開放されていない場所を見学した。図書館に来るのが初めての子どもの中で、司書は、図書館で静かに本を読む市民を視界に含めながら、「図書館では静かにしてほしい」、「本の返却が遅れると借りたい人を待たせることになるので、貸出期間を守ってほしい」、丁寧に補修された本を手にとって、「本は丁寧に扱ってほしい」など、図書館と本の取り扱い方などの指導を



(左)Bookmobile (右)館内を紹介する司書と子ども

実感を伴えるような形で行っていた。

③目指せ！プロの読み聞かせ（司書による読み聞かせ指導） 所要時間 45分

司書による読み聞かせの基本指導が行われた。本の持ち方、本のめくり方等の指導を受けた後、子どもたちは小さなグループを作り、読み聞かせを行った。



（左）司書による指導 （右）参加者の読み聞かせ体験

④本選びの目利きになろう！（選書体験） 所要時間 45分

釧路市立図書館の児童室⁴⁾にて、班の読み聞かせで使う本や自由読書の本を借りていた。選書には十分な時間が与えられ、子どもたちは、45分間、遊び回ることなく、選書や読書の時間に充てていた。どの子も他者に感化されたのか、多くの本を借り出していた。



⑤のんびり読書@山小屋（自由読書） 所要時間 120分 ※移動等の時間を含む

宿泊施設から10km程離れた山小屋に移動し、焚き火にあたりながらの読書、ランプの光を使っての読書を体験した。少々薄暗く、肌寒くもあった（およそ15℃）。読書の他、希望者には、焚き火用の薪割り体験等も併せて行われた。



（左から順に）山小屋の中、山小屋の外、敷地内での薪割り体験

⑥ティーブレイク読書（自由読書） 所要時間 120分

フロアには、1人読書用の簡易ブース（次頁写真①）、友人らと共に読書をできるテーブル（次頁写真②）が置かれ、飲み物や食べ物をとりながら（次頁写真③）、読書ができるようになっている。子どもたちは私語をすることなく、読書の時間を過ごしていた。フロアの後方には数十冊の本が並べられており（次頁写真④）、ここでも選書の機会が設けられていた。

⑦ファンタジーフォレストを作ろう！（衣装作り等） 所要時間 120分

読み聞かせの本番用に、色つきのビニル袋を材料に、各自、自分が着用する衣装を作製した。衣装の様子は「⑨ミッション実行！」を参照。



⑧読み聞かせの極意（本番に向けての練習） 所要時間 90 分

工作用イス 4 台、1.5m 四方のブルーシート 1 枚を用い、各グループが翌日の発表会のための会場設営を行った。その後、統括係のボランティアスタッフから「お客さんを迎える意識」の重要性が指導された（写真左）。スタッフ用の運営要項には「技術的なことにこだわるよりもむしろ、仲良く練習させることが、成功の秘訣です」のようにある。主に、聞き手に配慮した本の持ち方、ページめくり、声の大きさ、読みの速度などに留意するよう指導していた。その後、グループに戻り、各自が練習を行った（写真右）。



（左）全体指導の様子 （右）参加者同士で練習

⑨ミッション実行！（読み聞かせ実演） 所要時間 60 分

41 名 17 家族を対象に読み聞かせ実演を行った。当日は 9:30 から一般客を受け付けることになっていたが、一般客は 9 時から集まり出していた。子どもたちは作製した衣装を身につけ（写真上）、若干の練習の後、本番に挑んだ（写真下）。

	大人	小6	小5	小4	小3	小2	小1	6歳	5歳	4歳	3歳	2歳	計
男性	10	1	0	0	0	2	2	1	2	0	1	0	19
女性	11	0	0	0	0	1	3	0	1	4	1	1	22
計	21	1	0	0	0	3	5	1	3	4	2	1	41

表2 ファンタジーフォレスト参加者（一般客）内訳



III 結果と考察

1 学校教育の立場から

冒頭に述べたように読書教育はもはや学校の教育活動に限定されるものではなく、家庭教育、地域教育との連携によって持続的に推進されるべきものとなっている。しかし、その実態は中核となるべき学校図書館と公立図書館との連携ですらいまだ不十分である（岩崎;2010,2011）。その上で、今回の調査対象としたネパール厚岸の「ネパールブックワールド」を注視すると、

この事業を起点とした今後の可能性が際立ってくる。

まず、子どもたちは2泊3日の中で非常に多くの時間を本とともに過ごしていた⁹⁾。国語科の授業においても並行読書を積極的に採り入れるなどして、多読を進めているところであるが、今回の「ネイパルブックワールド」では、それが集中的に実現できていた。そして、「ネイパルブックワールド」での読書が子どもの生活の一部に位置付けていたことも興味深い。そこで子どもたちは意図的・計画的に管理された、いわゆる学校内読書ではなく、まさに、ネイパルでの読書体験を楽しんでいるようであった。さらに、外部人材の活用も効果的であった。今回、図書館司書といった専門職の他、ボランティアスタッフの協力を得ることで、事業の質的充実が図られていた。特に、ボランティアスタッフについては2泊3日のほぼすべてを子どもと過ごし、安全面に配慮しながら、子どもの読書活動を支援していた。こうした外部人材を学校教育の遠足・集団宿泊の行事だけでなく、他の学校行事においても活用することができれば、教員の負担軽減につながることだろう。

学校教育には様々な制約があり、現状では読書を目的とした宿泊体験と保護者・地域のニーズに即した事業の同時開催、外部人材の積極的活用を掛け合わせた複合的プログラムを開発・実施するには限界がある。今後、学校教育は社会教育施設との協力関係の構築に努め、そのノウハウを学び取っていかねばならない。今回の視察からはその示唆を多く得ることができた。

以下には、主に国語科教育の立場から、今後の発展可能性（改善点）を示すことにする。

「ネイパルブックワールド」は読書への出会いや読書行為の量的充実という点ではおおむね成功していた。その点を高く評価しながらも、そのよりいっそうの発展のためには、まずは、大村はまが述べるところの「実の場」の発想が必要である。以下は大村の言説である。

自分でほんとうに求めて「読書のしかた」を習おうとする気持ち、求める気持ちで、「読書のしかた」に食いついていくというふうではなければならぬと思います。それが私の言う「実の場」ということなんです¹⁰⁾。

今回の事業を視察し、小学生たちの喜々とした表情を見ることができた一方で、中学生の参加者が極端に少ないことが気になった。それはおそらく中学生にとって「読み聞かせ」というミッションが魅力的ではないのだろう。過去には、ブックトークやアニメーションが取り入れられていたようであるが、現在は、「読み聞かせ」のための選書・読書が主たる活動となっている。改めて、あの場にいた子どもたちが、一人の読書主体として、「もっと読みたい」、「もっと読めるようになりたい」のように貪欲な態度であったかどうかを思い起こす必要がある。現状は余暇の読書に止まっており、参加者の成長実感をもたらすようには見えなかった。

その上で、2点、指摘する。1つは「読み聞かせ」が伝達行為であることを鑑み、「あなたは本の何をどのように読み伝えるのか」と問うことである。子どもたちは最終日にある「ファンタジーフォレスト」に来るお客を喜ばせるために、うまく読むための練習に励んでいた。その際、例えば、文・単語レベルの強調技法であるプロミネンスを指導するだけでも表現への主体的探究が始まるだろう。プログラムにはそうした伝達欲求の刺激と指導が不足していたように思う。

そして、もう1つは「読み方」の指導である。山元(2014)は、ローゼンブラットの研究を

踏まえ、「読むこと」の能力を育てていくためには、「喜びを味わう aesthetic」と「情報を取り出す efferent」を絶え間なく往復することが重要であることを指摘している。それを担えるような専門性を有したスタッフの確保と活用が必要である。そうしたスタッフは、端的には、子どもを自立した読者に育てるための専門家であり、個に応じた選書、読書への出会い、読みの方法の学習をコーディネートできる人材である。類似の概念としては、国際読書学会が提案する「リテラシー・コーチ⁷⁾」やアニメーションにおける「アニマドール⁸⁾」がある。「ネイパルブックワールド」でも司書資格を持つスタッフが選書を行ったり、現職の小学校教員がボランティアとして参加し、読み聞かせの心構えなどを説いていたが、そうした人材の専門化が喫緊の課題である。

また、読むという行為の原理に立ち戻り、それを選書に生かしていくことも必要となろう。そもそも読むという行為は、「読者」と「作品」の相互作用による「衝突」、「共鳴」、「譲与」と見なすことができる。作品、ここでは特に文学的文章ということになるが、特定の場面に置かれた登場人物の心情や言動が読者である自分にとって容認できないことがある。それが「衝突」であり、容認できる場合が「共鳴」である。「共鳴」によって、読み手は自身の心情や言動の確信を強め、より確かな自己を形成していく。また、「譲与」は、作品の伝達構造に従って読み進める読者が、新たに学び取る心情や言動のことである。読書によって読み手に引き起こされるこうした現象に着目して、選書やプログラムの開発がなされると、よりいっそう、子どもたちは自立した読者に近づきやすくなる。

読書教育は、それぞれの機関が独自に行うのではなく、各機関の連携による重層的な連続性をもって行うべきものである。それには、各機関の連携努力はもちろんのこと、所管する教育委員会の強力なリーダーシップが不可欠となるだろう。種々の課題はあるが、「ネイパルブックワールド」は読書教育にとって極めて重要な「本への出会い」を実現している。プログラムの改善を図りながら、今後も継続させていくべき事業である。

(文責：花坂 歩)

2 社会教育の立場から

本節では、ネイパル厚岸における「ネイパルブックワールド」の取り組みから、学校外における読書活動の推進とその可能性について考察する。

(1) 少年自然の家を取り巻く現状と課題

本研究の主題でもある読書活動の推進において、特筆すべきは少年自然の家という社会教育施設における活動に着目している点であろう。

少年自然の家とは、高度経済成長期における学力偏重主義の教育に抗するため、1970年代に設置が進められ、「義務教育課程にある少年に、年間を通じて、自然のなかで集団宿泊生活を体験させ、その健全育成をはかるため設置された社会教育施設⁹⁾」である。それまで学校卒業後の青年・成人を対象とした学習活動として位置付けられ発展してきた社会教育において、在外青少年の教育活動に学校教育とは異なる「学校外教育」や「子どもの社会教育」としての教育的価値を提起した点において、その果たしてきた役割は小さくない¹⁰⁾。

一方で、学校教育の肥大化や価値観やライフスタイルの多様化によって、利用者の減少や行財政改革の見直しの対象となり、平成14年には746施設であった少年自然の家を含む国立・

公立の青少年教育施設は、平成 23 年には 471 施設と 9 年間で約 35 %にあたる 275 施設が減少している(中央教育審議会;2013)。こうした施設の廃止・統合と並行して、2003 年の地方自治法の一部改正による「指定管理者制度」の導入によって「公の施設」の民間事業者への全面委託が可能となったことで、公設民営の少年自然の家も少なくない現状となっている。実際に、本稿で取り上げたネイバル厚岸も、平成 19 年 4 月 1 日より NPO 法人根釧 NET が、平成 22 年より根釧 NET・クロエ_コンソーシアムが指定管理者として管理運営を行っている。こうした公的社会教育の縮小と民間活用の流れによって、少年自然の家の存在とそこにおける教育的意義が改めて問われている。

こうした背景をもとに、ネイバル厚岸の取り組み事例を見ると、これまで自然・集団宿泊体験に特化していた少年自然の家の活動の広がり可能性を見ることができよう。「ネイバルブックワールド」自体は、そのプログラムや事業目標の達成度という点からの成熟度は高いとは言いがたく、事業参加者にどのような体験を提供し、変容をもたらすのかという点では、今後、改善の余地が残されていよう。また、自然体験のための施設で「なぜ読書なのか」、「自然の家での読書活動を通じてどのような子どもの力を育むのか」という疑問に対する実証性が乏しい部分は否めない。しかし、教育振興基本計画にも提起された「個性を尊重しつつ能力を伸ばし、個人として、社会の一員として生きる基盤を育てる」ための「規範意識を養い、豊かな心と健やかな体をつくる」ための体験活動・読書活動として見た時、「ネイバルブックワールド」における集団宿泊生活における山小屋のランプの光で読書をする体験、雪中テントに宿泊し、その中で読み聞かせを行う体験、キャンプファイヤーを囲んでの読書体験は、子どもにとって非日常的な魅力に富んだ体験であるとともに学校教育とも異なる価値を提起する少年自然の家での体験活動の独自性と可能性を有した読書活動として評価できよう。

(2) 体験と読むことの関係性

こうした学校教育とは異なる教育的価値の可能性をみる時に、論点となるのが体験と読むことの関係性であろう。

文科省の定義によると、「体験」とは「経験のうち、(中略)能動的な経験や具体的な経験」を指すとされ、「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」を「体験活動」としている(中央教育審議会;2007)。また、その具体として、見る(視覚)、聞く(聴覚)、味わう(味覚)、嗅ぐ(嗅覚)、触れる(触覚)といった感覚を働かせて、あるいは組み合わせ、外界の事物や事象に働きかけ「子どもたちが身体全体で対象に働きかけかかわっていく活動」とも提起する(文部科学省初等中等教育局;2002)。つまり、体験とは子どもの主体的かつ無意図的な体験であるとともに他者の教育的意図の介在という相反した性質を内包すること、そして、その教育的意図は、他者の対象理解をもとにした「望ましい」体験の構成によって規定されることが読み取れる(永田;2016)。

国立青少年教育振興機構(2015)「子供の生活力に関する実態調査」によると、小学校 5 年生の生活スキルとして、「ナイフや包丁でりんごの皮をむく」ことができる割合が 43.9 %、「家の人に起こされずに、決められた時間に自分で起きる」割合は 49.2 %と、いずれも半数以下の達成度となっている。また、子どもの体験活動に関する状況としては、「ふだんから山や森、川や海など、自然のなかで遊ぶこと」をしている割合は、同じく小学校 5 年生で 43.1 %となっており、自然体験や生活の自立に関するスキルが貧困な状態となっている現状が把握できる。

また、子どもの日常の生活状況として、小学5年生が「よくある」と答えた項目を見ると、「テレビを見る」(85.1%)、「ゲームをする」(52.3%)と室内におけるメディア接触に関する項目が高い割合を示す一方で、「本(マンガや雑誌以外)を読む」(35.4%)、「学校の授業や塾以外に勉強する」(26.1%)、「家の人(兄弟姉妹を除く)にその日の出来事などを話す」(42.9%)と家庭での読書や学習、家族との会話は低い結果を示しており、子どもの家庭での生活がメディアに占有されている状況が明らかとなっている。

こうした子どもの日常生活における生活・自然体験の欠損・収奪に関する状況については、1970年代以降、種々の調査でも指摘されてきた。また、近年においては、体験と学力との相関性についても、明らかにされつつある。その中では、子どもの学力格差の背景には、生活・体験の格差が潜み、学習の前提としての基本的な生活習慣や生活技能といった子どもの日常性における体験を基盤としつつも、子ども自身の日常生活から失われつつあるものを意図的に子どもに体験機会を提供する営みをどのように創出するかが問われている(正平・永田・相戸;2010)。その点においては、子どもの日常からは失われつつある体験を把握する「診察」と、今後の彼らの成長発達に必要な体験とは何かを設定する「処方箋」という両者の行為を行う他者の存在が不可欠であり、そのための教育プログラムの立案・編成においては、支援者の経験や勘に基づいた個人的主観性からいかに脱却するかが問われている(上野・九野坂;2004)。

そうした観点から、「ネイパルブックワールド」における山小屋のランプの光で読書をする体験、雪中テントに宿泊し、その中で読み聞かせを行う体験、キャンプファイヤーを囲んでの読書体験は、読書という学習活動かつ生活行動を非日常的な空間・環境において体験することによって、インプットとしての読書体験とアウトプットとしての自己表現を組み合わせた体験として理解できよう。また、学校教育活動であれば必然的に伴う学習者や活動に対する評価から解放され、子どもの主体的な意思を前提として展開される読書活動である。それにより、子どもは、読書した本のストーリー等の理解にとどまらず、その読書体験を通じて自己の創造性や感性と向き合う過程が潜む教育活動としても興味深い。

したがって、今後、この「ネイパルブックワールド」活動を経験した子どもが、体験の前後でどのような印象をもち、変容したか、そしてその後の学校活動や家庭生活において、読書とどのような関係性を築き上げているか等の点について継続的に検証していくことが、この活動の教育的意義を実証することにつながっていくのではないだろうか。

(3) 学校・家庭・地域の連携が生み出す新たな教育の可能性

最後に、「ネイパルブックワールド」における読書活動を支える重要なファクターが、活動を支援する釧路市立図書館との連携・協働であろう。自然体験活動を専門とするネイパル厚岸と図書館を活用した住民の教養・文化の向上を目的とした釧路市立図書館の連携があつてこそ、この「ネイパルブックワールド」の活動が成立・充実したものとなっていると言っても過言ではないだろう。

前述したとおり、現在、社会教育施設ならびに公的社会教育は、社会状況の変化を背景に、その存在意義について批判的な指摘がなされる中で、それぞれの施設が有する資源や専門性を活かしつつ、いかに新しい教育的価値を生み出すかが問われている(松下;2003)。その中で、地域資源を活用した社会教育施設間の連携・ネットワークの構築はもちろん、学校教育との融合や社会教育がこれまで培ってきた機能や専門性をいかに拡充させていくかが重要となる。

実際に、2006年に改正された教育基本法では、第13条に「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする」と学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力の必要性が新たに加えられた。これを受け、社会教育法の改正を経て、学校支援地域本部事業等に代表されるように学校支援・家庭教育支援が国及び地方公共団体における社会教育の主要な任務となっている¹¹⁾。この改正によって、これまで学校教育と社会教育が「車の両輪」としての位置づけから、社会教育が「支援」する立場へと変化したことで、社会教育がこれまで培ってきた専門性と独自性を基礎としつつ、異なる機関・領域との連携協力によって新たな教育的価値をどのように創出していくかが問われている。

今回の事例においては、ネイパル厚岸と釧路市立図書館の連携・協働は、初日の午後の活動である①図書館まるごと大発見、②目指せ！プロの読み聞かせ、③本選びの目利きになろう！のプログラムのみにとどまっている。また、活動の内実としても、当該時間帯では釧路市立図書館が主体となる一方で、その他のプログラムにおいては関わりがうかがわれる場面は少ない。そもそも協働とは、「同一の目的をもって、ともに協力して働くこと¹²⁾」であり、部分的な連携にとどまることなく、学校外における読書活動の推進という目的共有と両施設が対等な関係に立ったパートナーシップの形成を前提とした事業展開の探求・改善の過程が、「ネイパルブックワールド」の広がり充実につながるとともに、地域における読書を介した地域・子育てコミュニティへの波及が期待されよう。

加えて、今回の調査事例では確認することができなかつたため言及するのは難しいところではあるが、学校や家庭との連携・協力関係をいかに構築していくのか、言い換えるならば、自然の家での読書活動という非日常的な体験を、子どもの日常生活につなげる視点こそが、今後の課題として提起できよう。

(文責：永田 誠)

附記 本稿は、平成27年度大分大学教育福祉科学部短期プロジェクト（若手研究者研究支援プログラム）「学社の垣根を越えた読書活動の推進に向けての調査研究」（研究代表者：花坂歩）の助成を受けての研究成果の一部である。本研究における調査は花坂が行い、永田との協議を経て、その成果を本稿にまとめた。

参考文献

- 1) 岩崎れい(2010).中等教育の読書支援における国語教育と学校図書館サービスの連携の可能性、『京都ノートルダム女子大学研究紀要』,40,1-12
- 2) 岩崎れい(2011).学校図書館をめぐる連携と支援:その現状と意義、『カレントアウェアネス』,309,23-28
- 3) 上野景三・九野坂明彦(2004).生活体験学習の実践と理論の統合にむけて、『生活体験学習研究』,第4号,1-17
- 4) 国立青少年教育振興機構(2015).「子供の生活力に関する実態調査」報告書～子供に必要な生活スキルとは～
- 5) 中央教育審議会(2007).次代を担う自立した青少年の育成に向けて（答申）
- 6) 中央教育審議会(2013).今後の青少年の体験活動の推進について（答申）

- 7) 永田誠・時田純子(2016).子どもの育ちの過程を通じた保育における生活体験の意義に関する考察—卒園10年後の子どもの記述を手がかりに—,『生活体験学習研究』,第16号(掲載予定)
- 8) 花坂歩(2013).読みにおける「予感」と「違和感」—読書行為論の授業実践研究—,『解釈』,672,44-52
- 9) 花坂歩(2014).間テクスト性に着目した学習材開発—「ろくをさばく」を用いた「羅生門」の運用,『国語論集』,11,219-227
- 10) 花坂歩(2015).「想像行為」の誘発から始める読書態度の指導(再考),『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』,2(2),No.5
- 11) 正平辰男・永田誠・相戸晴子共著(2010).『子どもの育ちと生活体験の輝き—これまでの通学合宿 これからの通学合宿—』,あいり出版
- 12) 松下圭一(2003).『社会教育の終焉<新版>』,公人の友社
- 13) 文部科学省初等中等教育局(2002).『体験活動事例集—豊かな体験活動の推進のために』
- 14) 山元隆春(2014).『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』,溪水社

注

- 1) 『『ネイパル』は『nature =自然』と『pal =友達』からなる造語で、北海道立の青少年体験活動支援施設(旧少年自然の家・青年の家)がもともと愛称として用いていた名称が現在正式名称となっているものであり、ネイパルを名乗る施設は道内に六施設ある。」(吉光寺勝己(2015).青少年教育施設を活用した読書活動事業—ピアサポートの視点を導入した「読み聞かせ」を軸として—,『国語論集』,12,107-115)
- 2) 「読書とネット講演会」(2015年10月10日10:00～12:00)では高木まみ氏(釧路市教育委員会生涯学習部生涯学習課課長補佐)による「生きる力と読書」の講演、佐々木章吉氏(KDDI ケータイ教室認定講師)による講座「電子メディア利用のマナーと正しい使い方」が催された。参加費無料。当日の参加者7名。「ファンタジーフォレスト」(10月12日10:00～12:00)については本稿のⅡ-(3)-⑨「ミッション実行!」を参照。
- 3) 最終日の「ミッション実行!」は稿者の公務の都合で参加していない。
- 4) 児童室:「児童室ではあかちゃん向け絵本から、幼児、小学生、中学生向けの絵本、小説、調べ物の本などを中心に、紙芝居や大型絵本までたくさんの本を揃えています。子ども向けからヤングアダルト向けの本があります。」(釧路市立図書館 <https://lib.city.kushiro.hokkaido.jp/> 閲覧2016/2/5)
- 5) ③目指せ!プロの読み聞かせ(45分)、④本選びの目利きになろう!(45分)、⑤のんびり読書@山小屋(120分)、⑥ティーブレイク読書(120分)、⑧読み聞かせの極意(90分)、⑨ミッション実行!(60分)を合計すると、480分となる。ここには⑤での山小屋への移動時間を含む。1人1人の厳密な読書時間は算出できないが、2泊3日で子どもたちは非常に多くの時間を本とともに過ごしていた。
- 6) 大村はま(1962).生きた場にすること(昭和37年11月広島大学教育学部国語科光葉会での講演),『大村はま国語教室11』所収,1991,p.98
- 7) 国際読書学会(IRA)による『ミドルスクール及びハイスクールにおけるリテラシー・コーチ・スタンダード』には、リテラシー・コーチの役割の一つとして、次が示されている。「リテラシー・コーチは国語科教師が生徒たちを積極的に学習に没頭させるための方法を知っており、それをモデルで示す。その方法には、生徒たちに作者の視点を表現させ弁護させたり、自分自身の視点を作り、それを表現させるように求めるということも含まれる。生徒たちに話し合いや対話をするよう促すための積極的な学習方法の実例には、ロールプレイや、ペアでお互いの考えを共有する、ジグソー、ペアでの問題解決、フィッシュボール(金魚鉢)、ラウンド・ロビン法などがある。」(訳出は山元。『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』,溪水社,2014,p.270)
- 8) 「子どもたちから本や活字の世界を発見する力を引き出し、子どもたちが読んだものを内面化していく、その子独自の読書のスキーマを作る手伝いをする、思考力をきたえ、生きる上で役に立

- つ判断をするための批判力を身につけさせること」ができるリーダーのこと。(モンセラット サルト・宇野和美他訳(2001).『読書へのアニマシオン—75の作戦』,柏書房,p.22)
- 9) 青木他編(1988).『現代教育学辞典』,労働旬報社,p.428
- 10) こうした学校外教育や子どもの社会教育に関する議論については,松永健哉によって提起された校外教育論を基礎として,1970年代から海老原治善や小川利夫,吉田昇らの社会教育研究者によって提起されるとともに,1980年代からは,学校週5日制の導入等の政策とも呼応するように学校外における子育て・文化活動を含んだものとして酒匂一雄,増山均らによって発展を見る。
- 11) 社会教育法においては,第三条(国及び地方公共団体の任務)において,「国及び地方公共団体は,(中略)社会教育が学校教育及び家庭教育との密接な関連性を有することにかんがみ,学校教育との連携の確保に努め,及び家庭教育の向上に資することとなるよう必要な配慮をするとともに,学校,家庭及び地域住民その他の関係者相互間の連携及び協力の促進に資することとなるよう努めるものとする。」と第3項に明記されたことが,これらの法的根拠となっている。
- 12) 原聡介編(2008).『教職用語辞典』,一藝社, pp.159-160

A Basic Study on the Creation of Reading Community

— Survey of Reading Activity Promotion Practices in a Social Education Facility —

HANASAKA, Ayumu and NAGATA, Makoto

Abstract

We're working on basic research to create a reading community. We focused on a reading education program carried out by a social education facility. We believe that it is necessary to establish connections between school education, home education, and local education. We had observed the reading done by children in the "Napal Book World" that took place in Hokkaido. The children there were enjoying reading as a part of their lives. However, there were two issues which need to be addressed. One is that there was no Reading Teacher available. The other is that the facilities were not connected with each other. In order to raise a child as a "Reader", it is necessary to link the various organizations. In this survey, we were able to expose various issues related to the improvement of "Reading education".

【 Key words 】 Promotion of book-reading activities, Facility to support the natural experience activities, Reading Community